

---

---

# NPOサーベイ会報

2011-12年 活動報告号

Volume 3

---

---

## クリエイティブ集団 「NPO サーベイ」

上村 勇夫

昨年の会報を紐解いて自分の書いたことを振り返ると、研究活動に戸惑いがちな私にとってこの会は「刺激の場であり癒しの場」であると位置づけております。今でもこの感覚に変化はありません。研究会では毎回新鮮な出会いがあり、とても前向きな議論が交わされる中で、歩みの鈍りがちな私の背中を押していただいております。みなさまとの出会いに改めて感謝いたします。そのような中で最近この会の魅力的な点としてさらに感じていることがあります。それはこの会に関わるみなさんがとてもクリエイティブな姿勢を持っている点です。

社会調査のNPOという至極独創的な発想に基づく組織を立ち上げたこと自体、既にクリエイティブなわけですが、その勢いは今に至るまで続いております。この1年間の研究会のテーマを振り返ると、①「盲ろう者へのインタビュー調査に挑む——通訳介助者から調査者へ」(2011-07-23)、②「ビデオカメラは調査の目——その実践経験から」(2011-12-18)、③「社会調査データのアーカイブ化——「原爆と人間アーカイブ」の試み」(2012-03-18)、④「量的調査研究の意義や疑問」(2012-07-29)でした。全て社会調査に関する企画ではありますが、扱う手法や対象が毎回異なりとてもバリエーション豊富なテーマに

なっていることがわかります。

私は特に①と④の企画立案にメインで携わりました。企画会議では前向きで建設的な議論が繰り広げられます。私の稚拙な提案ですらほぼ反対されることはありません。より自由に、よりダイナミックに、よりオリジナリティに富んだことをやりたい！そんなわくわくするような思いで取り組むことができます。守るものがない、緩いつながり。そんな集団だからこそクリエイティブなことが実現できるし、せっかくならこれからも面白いことをやっていきたいと思っています。実際に今も新たな企画が実施されようとしているところです。ご期待ください。

みなさまからのご提案もお待ちしております。なかなか普段の仕事では縛りがあってできないけどチャレンジしてみたいこと（もちろん社会調査に関することですが）や、同じ関心を持つ仲間ゆえに盛り上がりそうな企画など、クリエイティブ集団NPOサーベイを是非ご活用いただければと思っています。

## 新スタッフからの挨拶

岩館 豊

はじめまして、岩館 豊（いわだて ゆたか）と申します。2011年12月の研究会「ビデオカメラは調査の眼」での話題提供をきっかけに、NPOサーベイのスタッフとして参加させていただくことになりました。よろしく申し上げます。

2008年秋から、東京のあるアパレルメーカーでユニオンを結成した若者たちの、その日常的な組合実践がつくりだす社会空間について、ビデオカメラを積極的に用いながらフィールドワークに就いています。職場や組合実践の「現場」において、彼らが直面しているものは何なのか。彼らは何に対して「怒り」を覚えているのか。そして、日常的な実践によって生成する社会空間とはどのような成り立ちをしているのか。これらの問いに突き動かされながら、ビデオカメラを回してきました。

これまで僕自身は、しかし、ビジュアル・リサーチやビジュアル・メソッドといった「方法」そのものに強く関心をもってきたわけではありませんでした。もちろん調査手法の一つとして関心はあったし、いまは積極的にもっと学んでいきたいと思っています。ただ、自分がやっていることについて言うと、いろんな成り行きや「縁」でフィールドワークに取り組んでいたら、それが結果的に「ビジュアル・リサーチ」と呼ばれているものに近いという方がしっくりきます。「よし、ビジュアル・リサーチをやろう」とやってきたわけではなくて、ひょんなことから関わった「フィールド」で自分が見聞きした出来事を、たとえそこから多くのものがこぼれ落ちてしまっても、何かの「かたち」にして残したいと思った時、自分の手元にあったのがビデオカメラだったというのが正直なところです。

調査者が書き記すモノグラフやエスノグラフィが——そこにさまざまな緊張関係や権力作用があるとしても——固有の質感と豊かさをもった社会的世界のありようの一端を伝え得るものだとしたら、映像／ビデオカメラはそのために（も）有用な「道具」の一つだと思います。調査者の五感を生かした社会調査の実践と錬磨に向けて、克服すべき諸課題は冷徹に見据えつつ、でもどこかで楽観する心を大事に保ちながら「フィールド」での作業を続けていこうと思っています。

上述の研究会では、これまで自分がどこか勢いに任せてやってきたことをふりかえり、できるだけ正直にことばにしてみる機会をいただきました

た。参加してくださった方々からは、たくさんのコメントや問いを投げかけていただき、その時間は僕にとって「ぜいたく」なものでした。そんな時間を、さまざまなかたちで社会調査に関心をもつ方々と積み重ねていけたらと思っています。

## 場をつくる／提供する

大島 千帆

この1年間のサーベイの活動のなかで個人的に最も印象に残った出来事は、前回の研究会「量的調査研究の意義や疑問」でした。

これまでの研究会と比べ、福祉系の社会人学生の参加者が多い研究会でした。話題提供がすばらしかったことが契機となったことは間違いありませんが、それぞれが抱えている研究テーマや問題意識を吐露しつつも新たな気づきも見いだしてくださったと感じました。

私自身を含め福祉系の調査研究は、結果を出すこと、現場に還元する研究をすることを使命と感じている方が少なくないと思います。

それ故に、挑みたいことと自分の力のギャップに立ち尽くしたり、出口の見えないトンネルの中にいるような気持ちになることもあるでしょう。研究に関する議論も、〇〇分析はどうか、とか、そもそも調査設計に問題があったのでは、など実際にどう研究を遂行したらよいかという議論に向かいがちです。

福祉系はそういうものだとも思っていたふしがありました。前回の研究会でその認識は覆りました。やはり、もやもやとした気持ちを出し合うことや、本質的にどう研究に向かい合うべきか、という議論をしていく場は、非常に大事であると思いました。

と、いう点がこの1年間の活動の中で印象に残っている点です。次の1年も、サーベイが目指す「場をつくる／提供する」ことを大切にしたい活動をしたと思っています。今後とも、ご支援・ご協力どうぞ宜しくお願いいたします。

## 生成と連鎖——3周年に寄せて

小倉 康嗣

おかげさまで NPO サーベイは、設立 3 周年を迎えることができました。それも、このような弱小 NPO に実質的な関心を寄せてくださり、意味や価値を見出してくださる会員の皆様のおかげです。本当にありがとうございます。

本年度は、新規会員の方はもちろん、新たに若きスタッフが 2 名も加わってくれました。私は、社会調査とは、たんなる事実への接近ではなく、新たな認識を生成し、そこから人びとの連鎖をつくりだしていく（もちろん、その逆も然り）コミュニケーションであると思っています。サーベイという場を通じて、すこしずつでもそのコミュニケーションの連鎖が拡がり、累積していった——ありがたいことに、そんな実感を抱くことのできる 3 周年になりました。

ささやかでも確かな問題意識を粘り強くもちつづけ、うわることなく実質的な問題を皆様と考え、共有し、実践につなげていきたいと思っています。どうか今後ともよろしくお願い申し上げます。

## 1 年目の事務局を振り返って

木村 豊

昨年 10 月より NPO サーベイの事務局のお手伝いをさせていただいております。この間、「ビデオカメラは調査の眼」（2011 年 12 月 18 日開催）、「社会調査データのアーカイブ化」（2012 年 3 月 18 日開催）、「量的調査研究の意義や疑問」（2012 年 7 月 29 日開催）と、3 回のイベントのお手伝いをさせていただきましたが、この事務局でのお手伝いを通して、社会調査について改めて深く考える機会をいただいているように思います。

イベントでは、毎回社会調査に関する話題を提

供していただく方をお呼びしていますが、事前にサーベイのスタッフと話題提供者との間で打ち合わせを行っており、そこでは話題提供者の方が進められている社会調査についてお話をお聞きした上で、イベントの内容が検討されています。その打ち合わせの中ではイベント当日さながらの議論が交わされており、そうした中でどのようなイベントをつくっていくのかを考えることは、社会調査について深く考える機会となっているように思います。

またイベント当日は、参加者の自己紹介に始まり、話題提供者の方に社会調査に関する話題を提供していただいた後、ディスカッション時には参加者の間で社会調査をめぐる様々な議論が交わされています。毎回イベントには、様々な分野で社会調査に関わっておられる方々にご参加いただいております。話題提供者の方のお話もさることながら、そうした参加者の方々の様々な社会調査の経験をお聞きできることも、社会調査について深く考える機会となっているように思います。

NPO サーベイのイベントでは、そうした社会調査について自由に語り合い、また、社会調査について深く考えることの出来る場を、みなさまと一緒につくっていきたいと考えております。今後も定期的にイベントを開催していく予定ですので、ぜひ多くの方にご参加いただけたらと思います。また、過去のイベントの記録をブログ(<http://survey-npo.jp/blog/>)にて公開しておりますので、ぜひご覧頂けたらと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。

## これからのサーベイは？

松尾浩一郎

おかげさまでサーベイは 4 年めに突入しました。曲がりなりにも 3 年間の活動を積み重ねてきて、ある程度の満足感を感じています。決してやっつけ仕事でない、本当に意義があると信じられる活動を、細々ながらも続けることができたよ

うに思います。

3年間の試行錯誤の経験から、イベントなどを間違いなく運営するためのノウハウを得ることができました。しかしそのノウハウ、知識だけに頼って、漫然とルーチンワークを繰り返すようにはなりたくありません。4年目を迎えた今は、とくにこの点に注意しなければならない時期にあるように考えています。スタッフも参加してくださる皆さんも新鮮な気持ちでいられるよう、工夫をしてみたいと思います。

まだ個人的なアイデアなので実現するかはわかりませんが、狙っていることがふたつあります。

ひとつは積極的な発信をすることです。今のところスタッフは7人いますが、みなさまさまざまな形で社会調査に深く関わっている人たちです。最近では研究会形式のイベントを開いて話題提供者をお呼びすることが柱になっていましたが、そろそろ我々スタッフも調査者としての自分を世に投げかける順番ではないかと感じています。

もうひとつは「調査される人たち」や「これから調査をしてみたい人たち」とのつながりをつくっていききたいことです。具体的な企画案は一切ない段階なのですが、サーベイの主旨からいってもこうした方向性を追究することは大切なはずで、これから少しずつアイデアを練っていきたいと思います。

\* \* \* \* \*

## イベントの記録(1)

2011年12月18日 於早稲田大学  
《ビデオカメラは調査の目——その実践経験から》

話題提供：

岩館豊（一橋大学大学院）

企画趣旨：

調査とは「あるく・みる・きく」ことだと表現した人に宮本常一がいます。この宮本の捉え方はフィールドワーカーたちに広く受け入れられてきましたし、統計的な質問紙調査であってもかなり当てはまるといえるでしょう。

ほとんどの調査者は、調査過程のなかのどこかの段階で、対象となる社会的世界をあるき、みることを通じて、問題関心や理解を深めているはずで、調査方法論や研究の流儀に違いはあれども、自分の五感で体験したことは、多かれ少なかれ調査の根っこになっているように思います。

しかし現今の社会調査の多くは、こうした五感での体験をあまり重視していないように思われます。いわゆる質的調査も「きく」ことで得た情報を文字化したデータに焦点が合わせられることが通例です。統計的調査の場合は、調査者が見聞きし感じとったものを直接反映させる余地はわずかです。

調査者にとって重要な経験である「みる」ことを、もっと活かすことはできないのでしょうか。もっと活かせるように工夫してみても良いのではないのでしょうか。

今ではみなさんのポケットのなかに、携帯電話という名のカメラ／ビデオカメラが入っている時代です。家庭用のコンピュータでも映像を手軽に扱えるようにもなりました。社会調査に写真やビデオ映像をとったビジュアルな要素を取り入れてみることを、現実的な手法のひとつとして検討してみる時が、すでに到来しているように考えます。

今回ゲストとしてお招きする岩館豊さんは、都市部若年非正規労働者の労働組合実践を対象とした調査研究に取り組まれています。組合に集い活動する彼ら彼女らを、ビデオカメラを手に追いつけておられます。

岩館さんの調査のひとつの特徴に、ビジュアルリサーチという新しい方法の追求したい



を目的としているのではなく、矛盾や不条理さを内包した社会を生き抜こうとする個人の実践とその経験を調査するための効果的な手法として、ビデオ撮影が取り入れられていることがあります。新奇な際物ではない本物のビジュアルリサーチとしてお手本になるものです。

12月18日の集まりでは、岩館さんが撮影し編集したビデオ作品を鑑賞しながら、ビデオを使った社会調査の実際について、広く議論したいと考えております。ビジュアルリサーチを試みたい方も、ビジュアル利用に懐疑的な方も、ぜひお越しください。「百聞は一見に如かず」です。(松尾)

## イベントの記録(2)

2012年3月18日 於早稲田大学

《社会調査データのアーカイブ化

——「原爆と人間アーカイブ」の試み》

話題提供：

濱谷正晴（一橋大学名誉教授）

企画趣旨：

近年、社会調査のデータをいかにアーカイブ化するのかをめぐって議論が高まっています。

それは、社会調査を基にした研究論文を発表するだけでなく、社会調査によって得られたデータそのものを、整理・保存・公開することの重要性が認識されてきたことを意味しているように思います。

そしてそれは同時に、これまで行われてきた多くの社会調査のデータが、研究者によって私蔵・散逸されてきたことに対する反省を意味しているように思います。

これまで、実に多くの社会調査が行われてきましたが、そこで得られたデータは、どのくらい活用されてきたのでしょうか。また、現在も活用できるデータは、どのくらいあるのでしょうか。かなり多くの社会調査のデータが、ほとんど活用されないまま、今後も活用できないものとなっているのでしょうか。

しかし、そうした社会調査のデータの中には、現在の社会において、もしくは未来の社会において、大変価値あるものが多く含まれていると考えられます。そして、そのような価値ある社会調査のデータを、未来に生きる人びとが活用可能なものとして整理・保存・公開することが、今後、求められていくように思います。

そこで、今回の研究会では、現在、原爆被爆者調査のアーカイブ構築に取り組んでおられます濱谷正晴先生に話題提供をお願いしました。

濱谷先生は、一橋大学での45年間にも及ぶ原爆被爆者調査のデータを、多くの未来に生きる人びとがアクセス可能なデータベースとして広く公開し活用できるようにする「原爆と人間アーカイブ」の構築に取り組んでおられます。

話題提供では、そうした原爆被爆者調査の膨大な蓄積をアーカイブとして残すことの実際についてお話しいたします。また当日は、「原爆と人間アーカイブ」に関わられている方々にもコメンテーターとして参加していただく予定です。

そして、今回の研究会では、そうした話題提供をもとに、社会調査データのアーカイブ化をめぐる諸問題について考える機会としたいと考えております。(木村)

## イベントの記録 (3)

2012年7月29日 於早稲田大学  
《量的調査研究の意義や疑問——認知症グループホームにおける虐待予防に関する研究を通して》

話題提供：

松本望（日本社会事業大学大学院）

企画趣旨：

現在、量的調査を手法とする研究はいかに進めることができるのでしょうか。またそこからいかなる知見を得ることができるのでしょうか。近年質的調査研究が盛んに行われる中であって、量的調査研究のあり方について、改めて問い直されているように思います。

特に、大学院生が個人的な研究の中で調査を行い、学位論文を執筆しようとするとき、量的調査の手法はいかに有効な手段となり得るのでしょうか。そもそも、大学院生は個人的な研究の中で量的調査の手法を用いた研究をいかに進めることができるのでしょうか。

今回の研究会では、量的調査の手法を用いて、認知症グループホームにおける虐待予防に関する研究を進められている日本社会事業大学大学院の松本望さんに話題提供をお願いしました。

松本さんは、ご自身もグループホームで働いた経験を持ち、大学院進学後は、認知症グループホームの介護職員が求める虐待予防対策とは何かというテーマのもとで、量的調査の手法を用いた調査研究を進め、昨年度修士論文「認知症グループホームにおける介護職員が求める虐待予防策の検討——虐待予防策の因子構造と属性との関連をもとに」をご執筆されました。

その中では、認知症グループホームで働く介護職員を対象として行った虐待予防に関する質問紙調査をもとに、介護職員が求める虐

待予防対策について検討されました。

そこで今回の研究会では、近年大学院の中でも質的調査研究が盛んに行われる中であって、そうした量的調査研究にあえて「挑んだ」という研究の背景から、修士論文の概要、量的調査研究を行う中で感じた意義・苦勞・疑問についての話題提供をもとに、量的調査研究をめぐる諸問題について考える機会としたいと考えております。（木村）

## 会員関係

現在の正会員数は23名です。ニューズレターには66名の購読者が登録されています。

理事・監事は2012年9月をもって改選となりました。以下5名が重任となります。2年任期です。松尾浩一郎（代表理事）、後藤隆（副代表理事）、大島千帆（理事）、小倉康嗣（理事）、上村勇夫（監事）。よろしく申し上げます。

## 会費納入のお願い

会員の皆様には2012年度会費の納入をお願いいたします。年会費は1口3,000円です。同封した払込票は郵便局のATMなどをご利用になれます。ご協力いただければ幸いです。

口座名義 トクヒ) サーベイ  
口座番号 00170-9-568148

NPO サーベイ会報 第3号

2012年9月28日 発行  
特定非営利活動法人サーベイ  
www.survey-npo.jp  
151-0053 渋谷区代々木 2-27-16-902  
info@survey-npo.jp